

# 岳南会ニュース

第33号

発行

令和5年1月1日

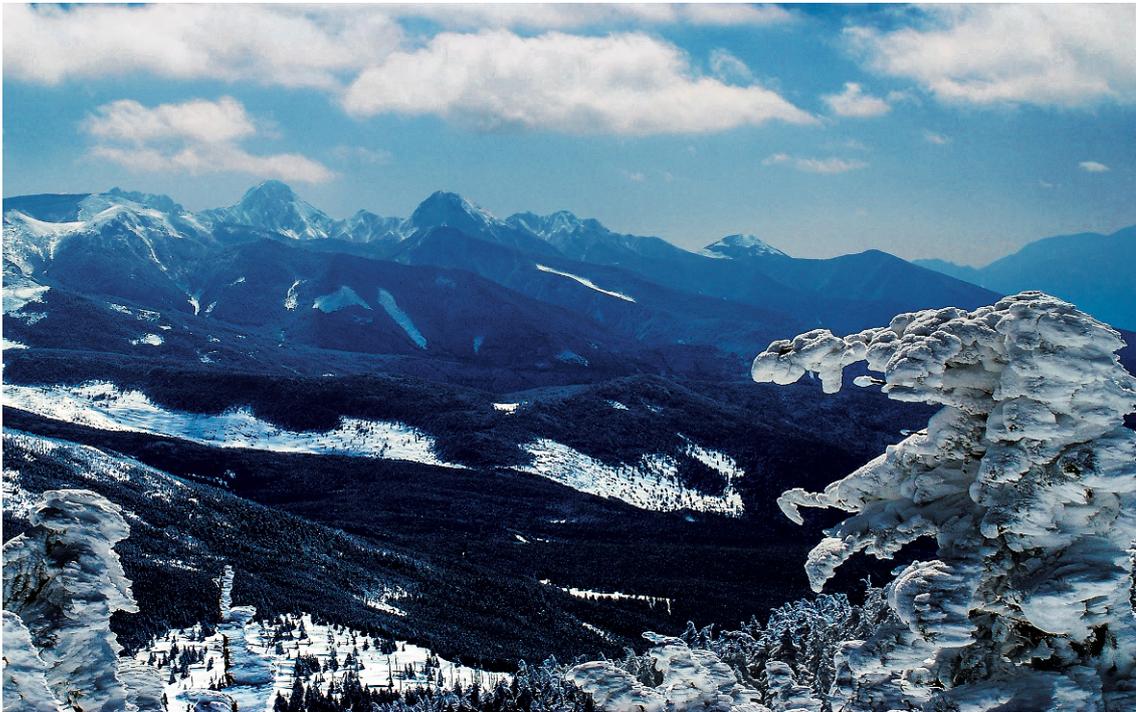
長野県野沢北高等学校

岳南会

TEL 0267 (62) 0020

FAX 0267 (63) 5290

印刷 (株)佐久印刷所



蓼科山頂より八ヶ岳を望む 撮影 阿部千活 (75回)



岳南会会長  
吉岡 徹  
(57回)

明けましておめでとございます  
コロナ禍もなかなか終息が見えない中、皆様におかれましては恙なく新春をお迎えになられたことと存じます。  
昨年は、本校創立百二十周年を記念する事業が滞りなく行われ、特に十月二十二日の記念式典は多くの来



学校長  
柳沢 敬

新年を迎えるにあたって  
岳南会の皆さまにおかれましては健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。  
コロナ禍で延期されておりました本校の創立百二十周年記念式典・教育フォーラムは、昨年十月二十二日、県立武道館に於いて盛大に執り行われました。微に入り細に入り御準備いただきました実行委員長の吉岡徹岳南会長様はじめ、御支援・御協力を賜りました全ての皆さまに心より感謝申し上げます。また、記念事業の一環として空調施設の充実や理科講義室の機器購入、探究ステーショ

ンの整備等に御支援を賜りましたことにつきまして、改めて御礼申し上げます。  
さて、今年度も引き続きコロナ禍での教育活動の継続を余儀なくされましたが、過去の感染拡大傾向を踏まえ、必要な対策に学校全体で取組むことで、多くの行事を実施することができました。六月の日輪祭では、三年生がリーダーシップを発揮し、在校生家族に限定した二日間の一般公開では、千人近い来校者を迎えることができました。充実の合唱コンクール、生徒会を中心に臨機応変に熱中症対策を講じた運動会も含め、素晴らしい日輪祭となりました。  
十月には、一年生が白樺湖で二泊三日の学習合宿を行いました。また、二年生は修学旅行で沖縄を訪れました。中学で修学旅行を経験できなかった生徒も多く、計画通り実施できたことは、国際情勢の緊張が高ま

を考えると必ずやプラスになったことと思います。  
さて、南高との統合再編問題です。昨年十一月十四日、県教育委員会は当面の最大の懸案であった新校の校地について「現野沢北高校の地が妥当」との見解を発表しました。本稿を草している時点では未だ正式ではありませんが、事実上の決定だと思われまます。これにより新校創設事業は本年二月の県議会の議決を経ていよいよスタートします。  
今後は、新校の学びの形をしっかりと形成するとともに、開校以来百二十年にわたって培ってきた質実剛健自主自立の精神を初めとする我が母校の伝統、文化をしっかりと新校に繋げていくことに力を致して参ります。皆様の引き続きのご支援をお願い申し上げます。  
末尾になりましたが、コロナ禍の一日も早い収束を願いつつ、本年が皆様にとりまして健やかで実り多い年となりまますことを祈念いたしましてご挨拶と致します。

の中で、大変意義深いものとなりました。  
「未来の学校構築事業」は三年目を迎え、学校を挙げて取組んできた探究のレベルは確実にアップしています。探究的な学びの手法は、佐久新校に受け継がれていく重要な要素です。理教科の課題研究と合わせて今後は、同窓生の皆さんを中心とする外部サポーターの協力を佐久エリアコンソーシアムの構築と活用により更なる充実を目指してまいります。  
佐久新校は、今年度内に再編実施基本計画の県議会同意を目指しております。順調に進めば、令和五年度には新校が目指す学びを実現する施設の検討が始まり、長野スクールデザインプロジェクト（NSD）がスタートします。岳南会の皆様におかれましては、今後とも変わらぬ御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

株式会社TLO京都  
顧問 佐々木剛史(72回)



私が北高で学んだのは昭和四十八年からの三年間である。誰もが持つ「自分の時代が一番良かった」的な思いは、歌、風景、空気感とともに強烈なノスタルジーとして去来する。

これからの人生を投影したかのような「神田川」、「なごり雪」、「木綿のハンカチーフ」等の名曲。「紫の佐久の高原」と校歌の一篇にもあるように、深く青くたたずむ浅間や、八ヶ岳連峰。通学時に泣かされた真冬の佐久大橋の寒風。中込駅を降りると、中込座方向へ伸びる商店街を進む南高生と、中央名店前とは言えやや寂しい道を佐久大橋方向へ進む北高生が分かれたが、柔らかな茶色いリボンのセーラー服と、ほとんど黒い学生服との分かれが青春真つただ中を強烈に感じさせてくれた。

北高のパンカラさと自由闊達さのバランスも心地よかった。上級生が、挨拶を教えると称して、地区毎に行われた「大食会」。なんだこの大人のような子供の会は？ との驚きと、先輩が遊び心たっぷり作るとてもないか

レーの堪能。自治的な雰囲気とそれを北高の伝統として許容してくれた地域の大人たち。酒盛り騒ぎもそう珍しくなかったように思う。OBが経営する酒屋さんに買い出しに行く、「あんまりやりすぎなよ」ニコッと笑ってくれたのも懐かしい。



知的財産高等裁判所にて講演 (2015年)

全校生が体育館に集まる行事では、直前まで大騒ぎをしていた言わばヤンチャな先輩方が、校歌斉唱になるとシャキッととして「北方に浅間火の山」と大声で歌い出したのには驚かされた。これもパンカラの一端か。そもそも第二の校歌のように歌われた学生歌の歌詞、「驕りの宴、玉杯の栄華の都遠くして……雄々しく掲げり立てば高原の日は輝けり」などは、都への集団殴り込みのような。

自由闊達の部類では、喫茶店(多分多くの方は特定可能では?) 因みに私たちが初期オリジナリティメンバーです)で全く荒唐無稽な政治観や歴史観を、サボリ仲間と語り合った事。

少し新聞班、一瞬バスケット(確か運動部も全て班と称していたと思う)では、先輩マネージャーへの憧れがほぼ全てで、いわゆる「汗と涙」はなくても自分の青春の存在は否定されなかった。そんな私(私達)に素晴らしい

プレゼントをしてくれたのは野球班だった。初めて甲子園を勝ち取ってくれたのである。(残念ながら今のところそれきりだが、是非次をがんばって欲しい)

私が高二の夏であった。県大会予選では、友人とバイクに二人乗りで上田や松本まで応援に出かけたと記憶している。その行為が校則に反していたのかどうか、そもそもそれを禁止する校則があったのかどうか、どちらにしろ大らかな校風であったことに違いはない。夜行の大型バス何台も連ねて、甲子園まで行ったのは幻のようであるが、氷をビニール袋に入れただけの物がカチワリと称した立派な売り物と教えられた事で、炎天下のアルプススタンドで皆で被ったチュールリップハットが長いこと実家に残っていた事は紛れもない事実である。

大らかさの校風は修学旅行にもよく出ていた。

出発前から、「ウイスキーを飲むならストリートですよ」と話してくれた先生。縛り付けずに大人扱いをしてくださったのだろう。女子生徒の自由なファッション。目的地での堅苦しい点呼や整列は



米国時代の同僚とマンハッタンにて (1994年)

なし。私は夜騒ぎ疲れたのか、京都清水のバスの中で目が覚めた時には、皆が参拜後に戻ってきたタイムミングであった。「なんで起こしてくれなかったのか」のぶつけ所も無く清水見学を見事空振り。

我が家では、面白おかしく、この清水喪失感が京大に進学した本当の理由ではないか、と言う事になっていく。未だにウォーキングで知らず知らず足が向いてしまいうのもまた清水事件の残影か。

これらの経験が、私の大人への後天的基礎固めに大きな影響を及ぼした事は間違いないが、これはどうかと思うイベントもあった。

校内模試である。進学校である以上、受験を見据えた模擬試験は付き物だが、名前が尋常ではなかった。コンクールだ、と違和感、反感を覚えたのも束の間、いつの間にか成績さえ良ければ、だいたい事は許される風なもの代表格になった。やっぱり北高はカッコいい。

勿論、公に誰が言うでもなく、仲間内の勝手な解釈だったかもしれない。

反作用的に、成績が悪い者はダメ、なる風潮があったのも事実である。(もともと、大学の同級生に聞いた都会の進学校の雰囲気はこんなにも生易しいレベルでは無かったが)こんな雰囲気だけで、北高の校風が、強者の論理を育むようなものだったとは言わないが、その後必要となる何かしらの精神的武装をしてきたように思う。

その後、雅な街とサイエンスへの憧れから京大工学部へ、車への興味からトヨタ自動車に入り主に知的財産分野を歩んだ。当初から熱望した訳ではないその専門分野の恩恵で、米国、欧州での駐在や国際的な大型特許訴訟を経験し、会社の枠を超え、日本の競争力を

議論する霞ヶ関での会議体のメンバーとしての官の仕事や、京大特任教授、名古屋市立大学理事等アカデミアでのポジションも経験できた。

因みに、その後と簡単に書いたのは、卒業式の記憶がないからである。卒業式は受験や合格発表の重なりで出席出来なかった諸兄も多かったのではないだろうか。自分もその一人だった。省略したものの、北高を語る上での重要行事の中でも、入学式(変な学ランに、白く細いベルトを巻いた怖そうな先輩がいた事以外の記憶無し)、応援練習(昼休みに応援団が「弁当しまえー」と新入生教室に乱入するところから始まるパンカラ物語)、真面目とおふざけが入り混じる体育祭(自由闊達の象徴的イベント)などと比べても北高の雰囲気は味わえなかった卒業式。涙はあったのか。女生徒は袴? 胸の第二ボタン、なんて時代だったか? 写真も口伝もない、残念。

私は良く自問自答する。過去に戻れるならどの時点かと。時には大学入学時、と微妙な時間差はみせるが、殆どが北高時代である。自分にはもともと別な道があったかもしれない、とか、より明確な目的意識をもって進路を選びたかつたとか、私の起点は北高に帰着する。そして最後は、その時の自分はその時点でやれる精一杯の事をしていたに違いない、半分自分を慰め納得する。

現役生の諸君には、自然、歴史文化的環境に恵まれた母校で、今出来る事を精一杯やって欲しい。これからのどんな道を歩いても、自分の称賛なり郷愁なり鼓舞なりの大きな拠り所の中心に北高がいるはずである。

# 第87回生卒業30周年記念大同窓会報告

去る八月十四日、佐久市岩村田にあるセントルミエールアンジュにて、野沢北高等学校、第八七回生卒業三十周年記念大同窓会が行われました。本来なら一年前が三十周年だったのですが、コロナ禍で一年延期とし、先日一年越しの開催となりました。当日は吉岡徹同窓会長及び、本校の先輩でいらつしやる野沢北高等学校長の柳沢敬先生が出席してくださいました。また七組の担任だった、英語担当の木内美穂先生も出席してくださいました。当時の思い出をたくさん語ってくださいました。本事業の実行委員長は佐久市白田で酒造業を営む一組、野球班の井出平くん橘倉酒造の秘蔵酒『菊秀』を提供してくれました。鏡開きには吉岡同窓会長、柳沢校長、木内美穂先生の他に、八七回生の生徒会長、唐沢大富くん、そして実行委員会より大井雅仁くんが登場。八七回生といえば、今話題の「新海誠」監督が仲間におり、実は今回の同窓会のために、ビデオメッセージを寄せてくれました。新海誠監督は現在、新作発表間近！ という



こともあり、会に出席はかないませんでしたが、貴重なビデオメッセージを拝見することができました。新海誠監督の新作を、同窓生一同楽しみにしている次第です。さて長野県野沢北高等学校は卒業三十周年、五十周年で同窓会を開く慣習があります。多感な青春時代を共に過ごした仲間たちと再会することで母校への愛情と、青春時代の思い出を共有し、今、まさに本校に通い、将来の地域の宝となるべく在校生へ応援のエールを送る、そんな目的がある、と認識しております。現在まだ、寄付を募っている最中ですので、十一月末には最終的な寄付金額がお知らせできるかな、と考えております。

実は私ごとにはなりませんが、現在は野沢北高校と野沢南高校の合併懇話会に地域代表メンバーとして参加しています。この一年半、先輩、後輩、佐久地域内外の同窓生からたくさんのご意見をいただきました。皆さん共通していることは、野沢北高校を卒業したことへの誇りに思い、高校時代の自らの頑張りが、今の自分を支えているとおっしゃることです。

六年後、野沢北高校は野沢南高校と合併し、佐久広域のNo.1スーパー進学校として生まれ変わることにあります。私は、私たちが野沢北高校を卒業したことを誇りに思うように次の佐久平新校を卒業したこともたちが胸を張って社会に出ていけるようなそんな未来志向の発展的な高校ができるように力を注ぎたいと思っております。

野沢北高校は今年で一二〇周年

を迎えます。本校同窓生は地域で、世界で、目覚ましい活躍をしております。私たち八七回生も、類にもれず、多方面で活躍しております。三一年ぶりの再会を祝ってお互いに近況を報告しながら、懐かしいひと時を過ごすことができました。今回の再会を機に、また故郷へ、母校へ、思いを馳せながら未来ある子どもたちのために、出来ることを模索していきたい、と参加者一同再確認しました。これからも地域から、遠くから、母校の発展を見守りたいと思います。

実行委員会事務局長  
廣末(旧姓黒澤) 恵子



# 88回生卒業30周年記念事業報告

本年度八八回生は卒業三十周年を迎えました。例年の卒回生になり母校への寄付事業と記念式典を計画していました。九月に発起人会、そして十二月に第一回実行委員会をひらき、各クラスの幹事を選出し、顧問に出澤剛君、事務局長を武井康洋君に引き受けてもらいました。

コロナ禍ということもあり、実行委員会は難しい運営でしたが、各クラス幹事や事務局の皆さんが素晴らしく、月一回の実行委員会に積極的に参加してください、寄付金と記念式典に向けて進んで取り組んで頂きました。本当にありがとうございました。

しかしながら八月十四日に計画していた記念式典を目前に控える中、日に日に新型コロナウイルス



の感染者が増加し、瞬く間に感染者数が過去最高を記録。中止判断基準の感染警戒レベルとなったことや式典当日までに感染収束が見込まれない状況下、事務局で協議を十分に重ね実行委員会に諮り、七月二十三日に中止という苦渋の決断をしました。学校長、岳南会長、担任の先生五名を来賓としてお迎えし、総勢一〇〇名にものぼる参加者と盛大に大同窓会を楽しむことができなかつたことは残念でなりません。また三十年ぶりの再会の場を提供できなかったことは実行委員長としても申し訳なく思っております。

一方、寄付金事業については多くの方に賛同をいただき、記念品ではなく寄付金として、八月二十五日に学校長、岳南会長に贈呈することができました。卒業して三十年が経過しても、母校に対して多くの方が想いを寄せているのだと感じた事業でした。この事業にご尽力いただいた方々に心より感謝と御礼を申し上げ、報告にかえさせていただきます。

(実行委員長 柳澤光宏)



# 68回生 卒業50周年記念事業報告

母校の創立一二〇周年記念式典の翌週、令和四年十月二十九日(日)に佐久グランドホテルにて記念事業式典、記念祝賀会を開催しました。

前年の令和三年二月、長野県の感染警戒レベルが二週間ほどで四から三そして二へと好転するなか記念事業に向けて発起人会を立ち上げ、準備会、第一回実行委員会と進みました。その間コロナ感染状況第六波、その後第七波と経験しましたが、今年九月には県警戒レベルが三まで下がりが十月一日に式典、祝賀懇談会の開催を時間を短縮する方向で決定。  
当日は六八回生七一名が集い母校への教育環境整備費として、参

加できなかった多くの同級生からも協賛金が寄せられ合せて贈呈することが出来ました。

担任して頂いた先生三名と同級生二名の物故者の黙祷に始まり、来賓として創立一二〇周年記念事業でご尽力頂いた岳南会会長 吉岡徹様、野沢北高校長 柳沢敬様をお迎えし母校の近況、そしてこれからお話頂きました。担任頂いた先生では健康状態が心配されましたが三組担任上原孝先生に越し頂き、ご高齢ながらジョークを交えた近況を伺い安堵した思いました。六組担任の草間文男先生は体調不良の中、娘さん代筆のメッセージを寄せて頂きました。幹事代読ながらその文面から先生

の語り口を彷彿とさせるもので懐かしく思うひと時でした。

懇談時間には各クラス毎に登壇し一人ひとり近況報告をし写真撮影、顔と名前が一致して笑いを誘う場面もあり、各テーブルでは懐かしいメンバー同士で記念撮影。校歌斉唱では奇怪なリーダーに合わせ母校の誇りを胸に歌うことが出来たのではないのでしょうか。卒業時の写真の拡大版を会場内に掲示し思い思いに見入り濃密な時間を過ごし明日に向け英気を養い元気な後期高齢者になれるよう頑張ろうと多くの方が想ったことでしょう。高校再編で統合されても名前が変わっても母校の未来に期待し、岳南会の益々の隆盛を祈念する最高の一日でした。

実行委員会 篠原一男



## 岳南会令和五年総会のご案内

日時 令和五(二〇二三)年一月五日(休)

場所 佐久グランドホテル2F  
佐久市中込  
☎〇二六七七八二〇〇三一

日程 13時  
総会 議事 会務会計・創立一二〇周年記念事業報告・高校再編等  
記念講演 14時15分  
演題：「脳の可能性を広げる工夫と若いへの備え」笑顔でバトンを渡していこう」  
講師 グループホームせせらぎホーム長：看護学博士 堀内園子氏 (84回卒)

懇親会 15時45分  
会費 六〇〇〇円

連絡先 岳南会事務局(野沢北高校内)  
☎〇七〇四三三〇六一五三六四

お知らせ 学友林は木材八二万円、土地二〇〇万円で売却することができました。



## 特集

# 創立一二〇周年記念行事

去る十月二十二日(土)、佐久市猿久保にあります、長野県立武道館に於いて、新型コロナウイルス感染症の蔓延により一年延期されていた創立一二〇周年記念行事が開催されました。当日は、六〇〇名弱の在校生に加え、十二時四十分から始まった吹奏楽班の演奏が響く中、来賓を含めて約三〇〇人の一般会員が来場し、母校の来し方、行く末に思いを馳せました。当初予定されていた懇親会は残念ながら行われませんでした。あちこちで同窓生らしき集団が語り合う姿があり、厳かな中にも和やかな雰囲気を感じられるひとときとなりました。



# 記念式典 午後一時～二時

## 式次第

- 一 開式の辞
- 一 物故者への黙祷
- 一 実行委員長式辞
- 一 学校長式辞
- 一 長野県教育委員会式辞
- 一 記念事業経過報告
- 一 来賓祝辞
- 一 佐久市長 柳田 清二
- 一 校長会長 駒瀬 隆
- 一 来賓紹介
- 一 祝電披露
- 一 記念品贈呈
- 一 生徒代表挨拶
- 一 校歌斉唱
- 一 閉式の辞

## 記念品目録

- 一 教育環境の整備
  - 一 教室・研究室空調設備
  - 一 探究教室整備
  - 一 理科学験室備品
  - 一 ビデオカメラ 紙折り機
- 以上 計七百八十万円

## 式辞



実行委員会委員長 吉岡 徹

十月も半ばを過ぎ、日に日に秋の深まりを感じる頃となりました。本日ここに、県教育委員会

並びに地元の市町村長各位を始め、多くのご来賓の皆様のご臨席のもと、本校創立百二十周年記念式典を開催できますこと、主催側として心からうれしく思っております。

顧みますれば、本校は、明治三十四年の開校以来、計二万三千九百名余の卒業生を社会の各界に送り出し、佐久地域の中等および高等教育の拠点校として揺るぎない地歩を占めて参りました。

明治三十四年と言えば、現在の在校生の皆さんからは、「ひいおじいさん」の更に一世代前の時代です。年表で見れば、当時は日露戦争の直前であり、小海線はまだ計画段階でありました。因みに小諸・中込間の小海線開通は開校の十五年も後の大正四年でありました。

以来百二十年間、校長は初代駒澤校長から現在の柳沢校長まで三十六代を数え、勤務された教職員の方々には、総勢実に九百名に垂んとします。本校はこうしたそれぞれに個性豊かな先生方と、一方で、陰ではそうした先生方を親しみを込めて、あるいは多少の揶揄を含めて「あだ名」で呼ぶ私たちが生徒とが、分かちがたい絆を結びながらその歴史を築いてきました。「あだ名」といえばかく言う私が現役であった六十年あまり前には国語の「蒋介石」と呼ばれた大工原先生、体育の「番長」と呼ばれた戸塚先生、日本史の「さんま」の市川先生等、「墓」と呼ばれた生物の山岸先生等々、あだ名で呼ばれた先生が多く居られました。いまでも面影と共に懐かしく思い出されます。

一方、本校の来し方は地元の住民の皆様を描いては語れません。学校運営に於いては様々な騒音や喧嘩が生じるのは避けられません。生徒の通学時のおしゃべりや笑い声しかり、運動会等の学校行事に伴うスピーカーの音声しかりであります。しかし、こ

のような騒音に関して、地元の皆様から苦情が寄せられたという記録は、本校にはありません。このことは、皆様がいかに生徒を、そして本校を、温かく見守ってくださったかを示す、何よりの証しでありましょう。

のみならず皆様には、昭和四十九年の野球部の甲子園出場に際してや、また太平洋戦争で戦死した二百三十七名の同窓生を祀る、合同慰霊碑の建立に際して、多額の寄付もいただいで参りました。こうした地元の皆様への、物心両面のご支援に対し、ここに改めて御礼を申し上げさせていただきます。

本当にありがとうございます。さて現下の状況です。只今本校は開校以来最大の変化の時を迎えております。皆様すでにご承知のとおり、少子化の進行に伴う、本校と野沢南高との統合による、新たな進学校創設の創設事業であります。

私たちは、この新創設に当たって最も重要なことは、本校が開校以来百二十年間、営々として培い、蓄積してきた本校独自の教育理念と伝統をしっかりと、新創設にしっかりと繋いでいくことだと、考えております。この考えに立つて南高同窓会とも連携しながら、新時代のモデルとなるような素晴らしい新創設を創設すべく、全力を挙げて参ります。

以上、本校創立百二十周年の節目に当たりまして、思うところを申し述べさせていただきます。結びに、本日ご列席くださいましたご来賓の皆様にご挨拶を申し上げますとともに、同窓生を始めご参集いただきまして、すべての皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。式辞とさせていただきます。

令和四年十月二十二日



## 式辞



長野県野沢北高等学校校長 柳沢 敬

浅間山に抱かれて、自然の営みは変わることなく百二十年の歳月を重ねてまいりました。佐

久平の爽やかな風を感じながら、本日ここに、県教育委員会をはじめ、御来賓の御臨席を賜り、野沢北高等学校創立百二十周年記念式典をかくも盛大に挙行できますことは、本校にとりまして誠に光栄であり、慶賀に堪えないところでございます。明治、大正、昭和、平成、そして令和、激動の近現代にあつて本校が長きにわたる歴史を刻むことができたのは、長野県や県教育委員会、地元自治体、並びに同窓会保護者の皆様はもとより、それぞれの時代に本校生徒を温かく見守り支えていただいた地域の皆様のお力添えがあつてこそと、厚く御礼申し上げます。

本校は明治三十四年、長野県立上田中学校野沢分校として創立、百二十六名の生徒と十一名の教職員によりその歴史が始まりました。その後、明治三十七年に独立、終戦の混乱と復興の中、新創設高等学校に移行、男女共学制も導入され、長野県野沢北高等学校として民主教育の歩みを始めました。

本校の沿革を紐解きますと、同窓会や保護者、佐久地域の皆様からの絶大な御支援が一貫して展開されてきた事実面に直向いたします。連綿と受け継がれてきた建学の精神「質実剛健」「文武両道」「自主自律」に拠つて立つ卒業生は二万四千名を数え、その活躍は、佐久地域をはじめ、国内各地や世界各国、さらには宇宙にまで及んでおります。雄大な浅間山を仰ぎ見る学び舎に集った多士済々、そして御支援をいただいた方々、その出会いと結束が時代を問わず本校発展の本質をなし、有為なる若者を社会に送り出す原動力となりました。

今、世界は未曾有の危機にあり、国境を越えた協力が不可欠な諸課題を抱えているにも関わらず、現状は新たな分断や争いに満ち溢れています。国内でも、長期にわたる経済の低迷や人口減少、急激な少子高齢化の進行が、先

とを実感させます。こうした荒波の中、本校では、平成二十六年から探究的な学びの充実に取り組んでまいりました。令和二年度からは「長野県未来の学校構築事業」スーパード探究校の指定を受け、理数科の課題研究とともに、学校を挙げ、地域の方々の協力のもと、簡単に答えの見つからない難題に果敢に挑戦しています。また、本校は、少子化に対応し、近い将来、伝統ある野沢南高等学校との統合によって、地域の新たな学びの拠点を創造する構想の途上にあります。

本校の創立百周年に際して上梓されました「野沢中学校・野沢北高等学校百年史」の中で、当時の岳南会会長であられた新津真澄先生は「母校が一世にわたつて、切磋琢磨のうちに築いてきた床しくも逞しい歴史と伝統は、永劫に燦然と輝きを放つてやまないものがある。故きを温めて新しいものがある。それを次代に確かに継承すると共に、現代のわれわれが自ら生きる力に繋げる」との大切さを説いています。

佐久新創設の創造はまさに、本校にある「誇らん哉その伝統」を「燦然たりその未来」に繋げる壮大な事業です。本校創立を記念するこの節目にあり、在校生の諸君には、佐久の広い空に高く輝く日輪のもと、浅間の雄姿を仰ぎつつ青春を謳歌したあまたの先達志を感じながら、真・善・美を追求し続け、自らの未来を自らの責任で主体的に切り拓くこと、そして、母校を誇るのではなく、母校が誇る人として、それぞれの世界で、社会に貢献することを願います。

結びに、本校の発展にお力添えをいただきました長野県、並びに県教育委員会をはじめ歴代の校長先生方、教職員、同窓生、保護者の皆様、そして並々ならぬ多くの御支援、御協力を賜りました地域の皆様衷心より御礼申し上げます。そして、教職員、生徒一同、決意を新たに、野沢北高等学校の更なる発展に邁進し、良き伝統を佐久新創設に継承して、地域の未来を担う学問の府の構築を目指すことをお誓い申し上げます。式辞といたします。

令和四年十月二十二日

# フォーラム

## 「佐久の風土と北高、そして未来」報告

式典に続き、各界で活躍されている同窓生七人による記念フォーラムが行われました。休憩なしの二時間四〇分にわたり、熱のこもったトークが繰り広げられ、出席した生徒、一般の岳南会員にとっても有意義な時間となりました。ここにその一部を紹介し、出席できなかった会員の皆さんにも当日の雰囲気を感じていただければと思います。



### 登壇者

- いではく (56回) 作詞家 前日本音楽著作権協会会長
- 吉岡 忍 (63回) 前日本ペンクラブ会長
- 佐々木剛史 (72回) TLO 京都顧問
- 原 真人 (76回) 朝日新聞東京本社編集委員
- 小泉 修一 (78回) 脳科学者 山梨大学医学部教授
- 青木 理 (81回) フリージャーナリスト
- 小木田順子 (81回) 幻冬舎新書編集長



### ■テーマ①

#### どんな学生時代を過ごしたか。

いではく：南牧からの通学に、行きに一時留半、帰りに二時間かかったので、残念ながら中学生時代に熱心にやっていた野球を続けることはできなかった。当時は石原裕次郎や小林旭の全盛期。汽車を待つ間に、映画館によく通ったが、何とか安く映画館に潜り込めなかったかと思ったり。映画を画策したこともあった。映画には音楽がつきもので、自然と歌謡曲に興味を持った。大学を決めたのも「人生劇場」という映画の主人公が早稲田の学生だったから。若い頃、何にでも興味をもって面白がるのが自分のその後の人生につながっていきのではないかと実感している。

（恋愛をテーマにした歌詞は実体験に基づくものかと問われて）汽車の中には南高などの女生徒もいたが、当時の北高生は硬派がモットーであり、話すことはほとんどなかった。

原：自分が新聞記者を目指そうと思ったきっかけは、岳南会の大先輩である井出孫六氏の著書「抵抗の新聞人 桐生悠々」を高校時代に読んだことだった。軍部に抵抗しながら反対を突きつけ、その姿勢を貴く姿に感動した。高校三年時、古典の漢文の授業があまりつまらないので同じ漢文の参考書を使って内職をしていたら、それを咎められ、参考書を取り上げられた。「あんなつまらない授業をしていて、他人の本を取り上げる権利がどこにあるのか」と憤り、二学期の間その授業をすべてボイコットし、図書館で本を読んだり「白樺」という喫茶店に行ったりしてサボっていた。しかし、そのままで卒業できないことがわかり、授業に出ること

にはなったが、ただ出るのも癪なので、入念な下調べに基づいてその教師の間違いを逐一指摘することに専念した。同時に其の教師を更迭するための署名活動も行い、卒業時、当時の校長に、集まった百筆を超える署名を渡した。

吉岡：一九六〇年代半ばの北高では音楽班がオペラを上演したり、文芸班が同人誌を出して賞を取ったりして、文化班が盛んに活動していた。自分は英語班や社研班に所属していたが、たいしたことは何もやっていない。ただ、本だけはめちゃくちゃ読んだ記憶がある。その後大学を中退したが、その頃、「もっと本当の勉強をしたい」と思い、高校時代に読んだ本を、その本の舞台となった場所へ行って読んでみるということをやった。例えばG・オーウェルの「象を撃つ」という本。北高の図書館で読んでいるのと、その舞台となったミャンマーの湿気と自然の中で読んでいるのでは理解の度合いが違ってくる。単なる知識だったものが、経験として身体の中に入って使える知識に変わる。これは大きな発見だった。



## テーマ②

現在の自分の仕事の中で何を感じ、どこに着目しているか。また、どんな悩みがあるか。

佐々木…(現在、日本の技術力、国際競争力が低下しているのはなぜかと問われて) 一時は日本が100%のシェアを誇っていた製品がこの数十年で激減した。原因は知的財産力にあるのではないか。例えば、丸鉛筆は転がってしまうので不便だと考えて、三角鉛筆を作り、その特許をとつても四角鉛筆や六角鉛筆の出現を止めることはできない。どういふ特許を取るかでその技術をどこまで守れるかが決まる。そのような戦いをワシントンやブリュッセルでグローバルスタンダードに基づいて戦ってきた者として、せっかく開発した技術をどう守っていくかが、今問われていると思う。研究の場である大学では、論文の引用率も大切にされるが、企業の立場から言つと、日本独自の技術がどんどん流出してしまうことには問題がある。

小泉…(脳科学において心は何によつてもたらされるのか。どんな議論がされているかと問われて) 二、三十年前は脳について



あまりにもわかつていないことが多く、ブラックボックスのようなものだったが、このところの技術革新により、脳内の地図がある程度描けるようになってきた。そのおかげで、「嬉しい」「悲しい」などの心の動きは、特定の神経細胞の組み合わせの回路がいくつかがつながることで感じられることが分かってきて、グリア細胞という細胞が注目を集めている。グリアというのは英語にするとうん(糊)という意味で、この細胞は回路同士がつながるときに糊のような働きをするもの。それは老化や記憶にも関わっていて、例えば、記憶の場合、記憶が形成される場所から、それを蓄積する場所へ移動させる現象が起こるが、それを行うのもグリア細胞であることが分かってきている。ただ、この細胞は眠っているときにしか働かないので、記憶するためにはちゃんと眠らなければなりません。

青木…(ジャーナリストとして現在のこの国に感じていることを問われて) この国は民主主義の国であり、民主主義にとつて肝心なことは、人々が判断する際の材料となる情報が自由なメディアによりきちんと提供されているかどうかということ。また、民主主義は多数決が原則だが、多数派も間違えることはあるので、それは間違っているのではないかと言いつける表現者の存在が、その最後の砦だと思う。自分もここにいる原さんと同じく、「抵抗の新聞人 桐生

悠々」を読んだことがジャーナリストを目指すきっかけとなったが、信濃毎日新聞の主筆であった桐生が昭和八年の社説で、当時行われた関東大防空演習を痛烈に批判したように、その時代に誰もがおかしいと思つていふことを言う人がいなくなることで壊滅的な被害につながってしまう。その意味で北高が原さんや吉岡さんのような反骨心ある言論人を輩出していることに、もっと注目してもいいのではないか。

(旧統一教会問題で日本の保守主義の危うさを問われて) 現在、保守という言葉が変なところで使われている。本来、保守というのは過去の歴史を学び、調べ、探究し、誤つたことの反省に基づいて未来を創つていくもので、過去に回歸しようというものではない。また、権力者は常に権力を行使することに對する恐れを意識していることが必要だが、現在の保守政党の権力者たちは、それを少しでも感じているのかどうか疑問だ。

小木田…(編集者として世界をどう見ているかと問われて) 切実に困っているのは本が売れなくなつていくこと。紙の出



版物の売り上げは二・七兆円から一・二兆円に、書店数は二二〇〇軒から一〇、〇〇〇軒を切るうとするくらい、この約三〇年の間に激減している。本や雑誌はいろいろな意見を世の中に放つ上で大切なプラットフォームであり、それが継続できなくなることは民主主義を支えるための大切なものが失われることを意味する。本が読まれなくなったのは安価で手に入り、いくらでも時間をつぶせる別のものが出てきてしまったからで、本はそれらに勝てないかもしれないとも思う。でも、本には自分から読みに行かなければならない不自由さがある分、そこが得たものは自分の心の中により深く残るといふ力があるので、はないかと考えている。人類史の中で長い歴史を持つ、この本というものを継承し、つないでいきたい。

吉岡…二〇一一年以来、ずっと東日本大震災のことを考え続けている。それは佐久という山国育ちの自分にはすごく大変なこと。例えば、漁業にどんな影響があるか考える場合でも、漁業や海についてほとんど何も知らない自分、漁師さんに船に乗せてもらつたりしながら、一から学ばなければならぬ。原発についても同じで、何でこんな複雑で危険なものが東北にあるのかと思つたら、古典を紐解き、歴史を学び、東北がこの国の中でどんな位置を占めてきたかを知らなければ始まらない。また、ウランという鉱物がどこから来

たのかを知るためには、宇宙の成り立ちが分からないといけない。つまりいろんなことを知らないで東日本大震災について語ることはできないということになる。

## テーマ③

それぞれの仕事に就くために、しておいた方がいいことは何か。

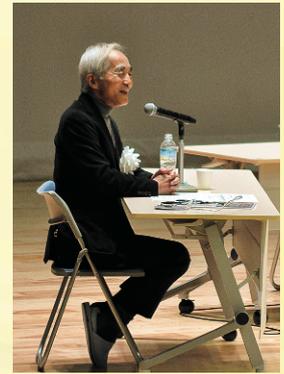
小木田…編集者になるためには、やはり本をたくさん読んで欲しい。その年齢で読んだときにしか感じられないことがある。それを記憶リストアップして欲しい。また、当たり前のことを疑つ訓練をして欲しい。例えば、今日、第一部からここまでこの壇上に立つた女性はたった二人しかいませんでした。

青木…この学校にはたかが三年間しかいなかった。五〇数年生きてきたうちのたったの三年間。でも、その期間、多感で、何者でもないけれど何者にもなれるという時期に出会つた本で人生の方向が見えた。この三年間を大切にしてください。また、自分が高校生の頃、OBの書いた本に影響を受けたのだから、今の自分も頑張らないといけないと思う。





もって、何を面白がっているのかを探ってください。



ピーするような操作をするのにグリア細胞が役立つというわけですね。

質問：SDGsの達成可能性は低いと思われるが、現代の政治家たちにできることは何か。

青木：SDGsはまとめてしまえばこの社会、人類がこのまま成長していきけるのかということだと思う。だから、今の政治家たちより一〇代、二〇代、三〇代がもっと声を上げて政治や社会を動かしていく方が大切。切迫した声の世界を動かしている。もっと若者が政治参加することが必要。

質問：知的財産力について具体的に教えてください。

佐々木：技術を進めるためには投資が必要で、その投資を回収するためには、その技術を使ってお金が儲かるようにしなければならぬ。そのために特許を取って得しその技術の独占権を認めさせるわけだが、その特許が知的財産として力になるということ。ちなみにプリウスは一〇、〇〇〇を優に超える発明で保護されました。

\*紙面の都合上、すべての内容を紹介できず申し訳ありません。また、インタビュ形式で行われた発言を要約する形でまとめていますので、流れが不自然なところもあるかと思えます。あわせてご容赦ください。

文責 伴野健一 (75回)

小泉：研究者になるためには、ビジョンとハードワークが大切。

小泉：研究になるためには、ビジョンとハードワークが大切。だこのすべてが戦略につながる。そしてビジョンを達成するためのハードワーク。それは根性論的なものではなくもって冷静な判断に基づくものです。

原：新聞記者になるためにどうか、ここにいる全員の仕事に対して言えることかもしれないが、小泉さんの言うように当たり前のことを疑う姿勢が大切。同調圧力の強い日本で取って代わらない、流されないという資質は貴重。「和して同ぜす」にチャレンジしてください。

佐々木：どんなものを専攻するにしても、なるべく修羅場をくぐることを勧めます。数を重ねていくうちにどこにいても戦えるようになりませう。また、科学技術畑に身を投じるのであれば、日本は何で食っていくか、どう戦っていくかを考えてください。

い：歌は人の心の代弁者です。だから、世の中の人が何に興味をもって、何を面白がっているかを知ることが大切。そのためにも、まずは自分が何に興味を

吉岡：若い時、仕事と家庭で忙しくなる前にできるだけたくさん旅をして欲しい。自分が単なる情報として認識していたことを現地確かめて欲しい。そうすれば自分が何を面白がるか、何に関心があるかがわかるかもしれません。

「在校生の質問から」

質問：円安、インフレで日本の経済状況はあまりよくないが、私たちの生活にはどう影響があるか。

原：直接の答えにはなっていないが、その問題について考え続け勉強を続け、投票行動につなげてください。日本の技術力や産業力が力を残している今ならばまだ間に合います。とにかく政治を変えなければ。

質問：グリア細胞と記憶の関係をもう少し詳しく教えてください。

小泉：脳の中の覚える場所は海馬と呼ばれる場所、そこに記憶が留まることはできません。レム睡眠時にその記憶がコピーされ、記憶を蓄える場所である大脳皮質に移されます。そのコ

## 一一〇周年記念を終えて

私は令和三年度、長野県教育委員会高校教育課に在籍しておりましたが、早くから当時野沢北高校の山崎校長先生から「コロナ禍により一一〇周年記念行事は一年延期となる」旨のご連絡をいただいております。本年度、教頭として野沢北高校に着任し、延期となったこの一一〇周年式典を実行委員会事務局長として運営する側になるにあたって何か不思議なご縁を感じました。本年度も決してコロナ禍の不安がぬぐい切れないうち、武道館で式典、記念フォーラムおよび別会場における祝賀会の実施にむけてできるだけ早く第六回実行委員会を開催いたしました。しかしながら七月下旬からコロナ第七波が押し寄せ、学年閉鎖も余儀なくされた状況の中で、祝賀会断念を決定せざるを得ませんでした。それでもできる限り華やかに実施できるように式典およびフォーラムの充実に知恵を絞ってまいりました。実行委員会は基本的

的に土曜日の午後開催されましたが、休日にもかかわらずPTAおよび同窓会の関係者の方にお集まりいただき感謝の気持ちでいっぱいです。学校としては二学年の修学旅行を終えて一週間後の式典となりましたが、おかげさまで十月二十二日当日はコロナ陽性に伴う学級閉鎖や学年閉鎖などなく、在校生はほぼ全員参加することができました。マスク越しではありますが、吹奏楽班の伴奏にあわせて久しぶりに校歌も合唱する機会も得ました。生徒にとってもいつまでも記憶に残る式典となったと思います。関係者の皆様には重ねて御礼申し上げます。

(教頭 石川順三)



## 野沢北高校百二十周年記念誌

### 『真善美 ひたに追いつつ』の刊行と販売

百年史に続く記録として、二十一世紀のほぼ二十年間を記述します。

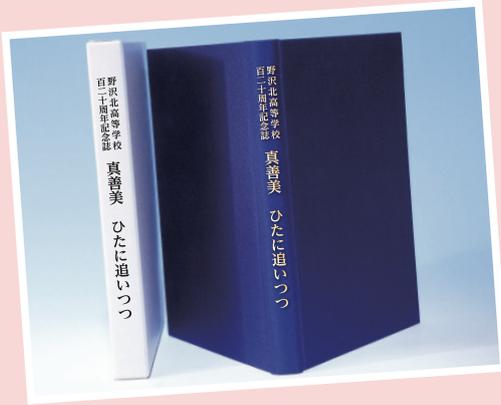
二十一世紀の野沢北高校、それは激動の二十年間でありました。理数科と普通科の競いあいによる進学の躍進、学校五日制と岳南塾・土曜公開授業、一二通学区制から四通学区制への移行、種々の評価制度の導入、「探究」授業への挑戦、コロナ禍への対応、県教委の野沢北・野沢南統合案の発表など、枚挙にいとまがありません。

そのような中で、教職員と生徒たちは、伝統と創造、継続と革新の心をもって、未来志向の堅実な歩みを続けてきました。その歩みはいかなるものであったのか、同窓生の期待にたがわれないものであったのか、執筆者一同、その道筋の再現に努めました。

当初は、どのような冊子を作るのか戸惑いました。記念写真集のようなものをつくるのか、百年史のような歴史記述を行うのか、率直に議論を重ねました。そして、百年史のどなりに置いていただけのもの、百年史から継続して、野沢北を記録するものを作ろう。あまりにも生々しく、まだ動いていることがらが多いが、それでも記録を残す努力をしよう、ということになりました。

詳しくは、同封のチラシをご覧ください。

(百二十周年記念誌部会)



## 令和4年 会務報告(総会1月5日以降、事務局把握分)

- |  |   |
|--|---|
| <p>1月 5日(水) 第1回役員会・第1回代議員会<br/>令和4年岳南会総会<br/>於佐久グランドホテル 参加者約90名<br/>記念講演 小泉修一氏(78回卒)山梨大学医学部教授<br/>演題:「あの日に帰りたい<br/>～野沢北高生だった頃の柔らかい脳に戻りたい～」</p> <p>2月28日(月) 第17回再編検討委員会(同窓会館)</p> <p>2月28日(月) 学友林樹木、吉本に売却契約締結</p> <p>3月 1日(火) 野沢北高校卒業式<br/>役員出席なし(会長祝辞プリント配布)</p> <p>3月12日(土) 岩村田支部役員会開催 出席者8名 正副会長出席</p> <p>3月26日(土) 120周年記念事業 記念誌部会</p> <p>3月30日(水) 第18回再編検討委員会(同窓会館)</p> <p>4月 6日(水) 野沢北高校入学式<br/>役員出席なし(会長祝辞プリント配布)</p> <p>4月 9日(土) 臼田支部総会開催<br/>出席者26名 正副会長、学校長、事務局出席</p> <p>5月 6日(金) 第19回再編検討委員会(同窓会館)</p> <p>5月21日(土) 120周年記念事業 総務部会</p> <p>6月 5日(日) 戦没者等慰霊祭<br/>貞祥寺 役員、学校長、事務局参加</p> <p>6月 8日(水) 第20回再編検討委員会(同窓会館)</p> <p>6月11日(土) 東京支部総会開催<br/>出席者35名 会長、学校長、事務局出席</p> | <p>6月13日(月) 岳南会ニュース臨時号発送</p> <p>6月18日(土) 120周年記念事業実行委員会(同窓会館)<br/>120周年記念事業記念誌部会</p> <p>6月25日(土) 関西支部総会開催 出席者21名 会長、学校長出席</p> <p>7月 9日(土) 120周年記念事業 記念行事部会</p> <p>8月11日～16日 第26回岳澄展(創立120周年記念美術展)<br/>野沢会館</p> <p>8月14日(日) 87回卒 卒業30周年記念同窓会 会長、学校長出席</p> <p>8月19日(金) 第2回役員会 (同窓会館)</p> <p>8月20日(土) 120周年記念事業実行委員会(同窓会館)</p> <p>8月27日(土) 第2回代議員会(佐久グランドホテル)</p> <p>9月17日(土) 120周年記念行事部会 120周年記念誌部会</p> <p>10月 1日(土) 120周年記念事業実行委員会(同窓会館)</p> <p>10月22日(土) 120周年記念式典・記念フォーラム举行</p> <p>10月29日(土) 68回卒 卒業50周年記念同窓会 会長、学校長出席</p> <p>11月 5日(土) 67回卒 卒業50周年記念同窓会 会長、学校長出席</p> <p>11月15日(火) 第21回再編検討委員会(同窓会館)</p> <p>11月24日(木) 会計監査(同窓会館)会長、監事、事務局</p> <p>11月26日(土) 野沢支部役員会開催<br/>出席者14名 正副会長、事務局出席</p> <p>12月 8日(木) 第3回役員会・慰労会 (同窓会館・三河屋)</p> <p>12月17日(土) 120周年記念誌部会</p> <p>12月19日(月) 第22回再編検討委員会(同窓会館)</p> |
|--|---|

## 会務計画(今後の予定)

1. 令和5年 岳南会総会(代議員会あり)  
1月5日(木) 岳南会総会 10時～代議員会 13時～総会  
於:佐久グランドホテル ※講演会有・懇親会有
2. 役員会(年3回 1月 8月 12月)
3. 代議員会(年2回 1月 8月)
4. 各支部総会(各支部ごとに計画)
5. 再編検討委員会(適宜)
6. 120周年記念事業実行委員会及び各部会(適宜)
7. 岳南会ニュース発行、協力金依頼(12月中旬)
8. 「卒業周年記念同窓会」; 30周年(89回卒) 50周年(69回卒)

本委員会は岳南会の意思を県教委主催の「新校再編実施計画懇話会（以下『懇話会』）」に反映するため、次に掲げた二つの懸案を実現するため議論を重ねてきました。その実質的な行動拠点は、引き続き野沢北・野沢南二校同窓会連絡協議会（二〇二〇年十一月発足）（以下『連絡協議会』）が担っています。

- ① 新校の学校像を構想する。
- ② 新校は「新しい校地、校舎」に開設する、という願いを実現する。

学校像を構想する

学校像は、昨年の本欄でご報告したとおり、二〇二一年に連絡協議会が発表した「期待する学校像」「期待する学校教育目標」「具体的な『目指す生徒像』」に端的に表現されています。（岳南会HP参照）それは、「確かな学力と豊かな創造性を育み、生徒が高い志を実現することができる学校」（「期待する学校像」）を創設するという一方で、「深い教養・広い視野・強い意志」（「具体的な『目指す生徒像』」で提示された三項目）を生徒が鍛える場とするということです。

現在、この連絡協議会の構想は、県教委と両校の先生方が組織する佐久新校プロジェクトチームの「佐久新校のイメージ（案）」に生かされ、「高い志の進路を実現し、未来社会の核として、地域・日本・世界で活躍

する人を育む」と表現されています。

新しい校地を希求する

JR小海線の駅に近い場所に統合新校を創設する、これは二〇二〇年一月の代議員会・総会以来岳南会の総意であり、この方針に沿って連絡協議会もまた活動を進めてきました。この間、独自の調査研究活動に加え、佐久市をはじめ地域の首長や地元選出の国会議員・県議会議員のご支援もいただき最適解を求めて県教委と協議を重ねてきました。しかし、二〇二二年六月に実施された第一〇回懇話会において、県教委から最終候補地の茨城牧場（県有地）返還の不調が表明され、新たに野沢北・南いづれかの校地を活用するという提言が行われました。昨年の本欄で危惧した「実現には高い壁」が現実のものとなりました。

一年余にわたる新しい校地希求の活動に終止符を打ち、地元中学生のために斬新で魅力ある高校の開設を急ぐ。先の懇話会発表の一週間後、第二〇回再編検討委員会は無念の思いを払拭し、そのように局面の転換を図ることを決め、八月の岳南会代議員会で報告、承認を得ることとなったのです。

その後、懇話会では新校の校地選定要件の検討に入ります。そして校地・校舎に係る環境、通学環境、学習活動を支える環境の三分野について敷地の広さ

や交通の利便性など十一項目を設定し、両校の比較検証に入りました。本委員会もまた、両校が独自に実施した比較検討に資するための地域住民アンケート調査に積極的に呼応し、岳南会員にむけ参加を促してきました。こうした経緯を経て、去る十一月十四日、佐久合同庁舎で行われた第一三回懇話会で県教委は検討結果を公表、佐久新校は野沢北の校地校舎を活用する旨、原案を示したのです。

おわりに

新校の開校年次は、二〇二三年三月の県議会同意を経て、およそ六年後の二〇二九年が想定されています。また、二〇二三年度には新しい校舎の建設に向けたプロポーザル方式による設計者の選考が予定されています。そしてこうした日程と同時に、十分な校地の確保、通学の利便性への支援など、岳南会にとっても等閑できない課題が山積しています。またさらに、野沢北・南の現同窓会をどのように新校の同窓会に接続していくか、衆議に待たねばなりません。再編検討委員会は、今後岳南会の意思を丁寧に取りながら、野沢南高同窓会との連携を一層密にし、これらの懸案に対応してまいります。

岳南会再編検討委員会委員長

篠原 秀郷（65回）

令和4年度 岳南会 一般会計決算書

会計期間 令和3年11月16日～令和4年11月15日

収入総額 20,570,305円 支出総額 6,616,948円 差引残額 13,953,357円

【収入の部】		単位:円
項目	収入済額	備考
入会金	1,200,000	6,000円×200人(令和4年4月入学生)
卒業生終身会費	1,960,000	10,000円×196人(令和4年3月卒業生)
総会会費	300,000	
事務費	300,000	岳南塾より事務職員人件費補助
岳南会館維持管理費	500,000	2,500円×200人(令和4年4月入学生)
進路指導支援費	500,000	2,500円×200人(令和4年4月入学生)
岳南会活動協力金	3,485,061	郵便局(1,567,611)・コンビニ(1,883,450)・現金(34,000)
繰越金	10,499,784	
雑収入	1,825,460	学有林土地(1,000,000)・伐採木(824,450)・定期(933)・一般会計利息
合計	20,570,305	

【支出の部】		単位:円
項目	支出済額	備考
会報発行費	2,429,236	会報印刷費、封筒印刷費、振込用紙印刷費、郵送料等
総会費	718,866	会場費、講師謝礼、総会案内用往復葉書等
役員会議費	212,404	三役会、代議員会、会計監査等
支部会議費	278,950	祝儀、旅費等
高校再編検討会議費	43,197	旅費、活動費等
慶弔費	378,296	餞別、香典、卒業証書用ホルダー、新入生校章バッジ等
財産管理費	22,416	固定資産税、山林管理費等
クラブ等後援費	288,950	1,000円×200名、全国大会祝儀、世界大会祝垂幕費等
進路指導支援費	600,000	進路指導支援
岳南会館維持管理費	661,661	会館電気料、暖房費等
事務費	797,620	事務職員人件費、事務用品、葉書、封筒、切手等
ホームページ管理費	185,352	各月ホームページ更新・管理
予備費	0	
合計	6,616,948	

以上相違ありません。

令和4年11月24日

会計監査 篠澤 一平 (印)  
木内 清 (印)  
荻原 泰昭 (印)



# 令和4年度生徒会行事

## 4月

### ◆対面式・新入生オリエンテーション・ 班活説明会・生徒総会

昨年に引き続きコロナウィルス感染拡大の影響を受け、2、3学年はZOOMを活用して行われました。

運営においては、接続など比較的スムーズに実施できました。コロナウィルスの感染拡大の収束が見えない中、最大限できることを模索しながらの行事運営となりました。

### ◆強歩大会

コロナ禍で開催が危ぶまれる中でしたが、強歩大会が無事開催されました。

当日は天候に恵まれ、暑さの中で全長約20kmのコースを完歩目指して取り組みました。アップダウンのある険しいコースでありましたが、生徒たちは一生懸命に取り組んでおりました。最後はゴールでの達成感を味わうことができ、良い経験になったと思います。



## 5・6月

### ◆高校総体 東信大会・県大会

各班、日頃の練習の成果を発揮すべく高校総体に挑みました。今年度は東信大会激励会をZOOMにて行いました。

今後は上位大会においてより活躍できるように取り組んでいきたいと思えます。以下、各班活動の主な結果です。

- ・陸上 1-5後小路葉月(5000m競歩) 北信越大会出場
- ・軽音楽班 Snow Flake 3-1伊藤朝暁 3-4花岡弥桜  
3-4田中葵 3-4坂手瑠美 全国総文祭東京大会出場



## 6月

### ◆日輪祭

コロナ感染対策・熱中症対策を講じながら、4日間の日程で行いました。

前夜祭、保護者限定公開(模擬店・クラス展示・文化班発表など)、合唱コンクール、そして後夜祭と、企画した内容を全て実施することができました。

準備段階で様々な苦難に直面する中ではありましたが、生徒会役員生徒を中心に最大行事である日輪祭を見事成功させました。



## 編集後記

創立一二〇周年記念式典で校歌斉唱を聞きながら、ふと、「学生歌は唄われなくなったものだな」と感じました。高校時代、何かと言えば学生歌を唄っていた世代にとっては寂しい現実です。自分の結婚式で旧友と肩を組みながら、また十数年前に他界した、OBである父の病床で涙に詰まりながら、唄ったのは「驕りの宴 玉杯の栄華の都遠くして」でした。

「あることが無駄か無駄じゃないかっていうのは、人間にはそのときはわからないものなんです。考えてみれば人生ってというのは非常に無駄が多いものなんです。まあ、その無駄が豊かさにもつながるんですけどね。」湯川秀樹博士の言葉です。一方、若者たちは、事あるごとに「そんなの何の役に立つの」と尋ねます。一見無駄に見えることの意味を説明する。難しいことですが、「豊かさ」を手離さないためにその努力を忘れたくないものです。

今号にも多くの方々から玉稿をお寄せいただきました。改めて感謝申し上げます。先行きの見えない社会情勢の中、令和五年がやってきます。会員の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈りいたします。

